

隨泉寺寺報

平成18年(2006年) 9月号 第433号

TEL 082-892-0217 <http://www.oterasan.co.jp/~zuisenji/>

浄土真宗本願寺派 高峯山隨泉寺

秋季彼岸会法座

講師 浄土寺住職 朝枝 思善師

講題 「偶法のよろこび」

『きりぎりす 鳴く夕かげの 山風に
よわり初める 日ぐらしの声』(小沢蘆庵)
『我のみや あはれとおもはむ きりぎりす
なく夕かげの やまとなでしこ』(古今244) 素性 法師

暑い夏もようやく朝夕はしのぎやすくなってきました。この頃、毎年今年の夏は特別に暑いと感じますが、これも地球温暖化の影響なのでしょう、年々暑くなってきているような気がします。9月の声を聞いたら、急に虫達の声がにぎやかに聞えるようになって来ました。反対に、子供の頃、ヒグラシゼミの声を聞くと夏休みの終りを告げているようで、物悲しい気持ちになったものです。

9月の法座予定

- 9月10日.....掃除 中須賀・コモンライ
- 9月14日昼席午後1時より.....秋季彼岸会法座
- 9月14日夜席午後7時半より.....出張法座 中須賀 山本恭子氏宅
- 9月15日朝席午前10時より.....主婦の集い おとき
- 9月15日昼席午後1時より.....秋季彼岸会法座
- 9月19日午前8時半より.....灯茶会準備
- 9月23日午後7時半より.....灯茶会
- 10月 2日午後6時より.....門信徒会本部役員会



☆おめでとうございます。長者原西の福永高さんに

長女眞子(まこ)さんが誕生されました。



我が家の新しい家族です。福永家に眞子というかわいい天使がやってきました。私達はもちろん、両親も大喜びで、なめるようにかわいがっています。日に日に成長していき、くるくると変る表情を見ているだけで、幸せな気持ちになれます。そんな眞子の百面相を見ていると、つい写真やビデオの量が増えていきます。眞子を私達の宝物として大事に育てていきます。お近くへお越しの際は、是非遊びにいらしてください。

平成18年6月 福永 高・敬子

☆主婦の集い 9月15日(木) 午前10時～

主婦の集いを開催します。暑い夏も過ぎ、台風が心配な時季です。もう秋の虫の声が聞こえてきます。行事の多い月ではありますが、少し心にゆとりをもってお聴聞してみませんか。朝枝思善先生のお話は解りやすく評判です。是非この機会に誘い合わせてお参り下さい。

☆灯茶会 9月23日午後7時半より(雨天順延)



『秋来ぬと 目にはさやかに 見えねども 虫の音にぞ 驚かれぬる』古今集4藤原敏行の作で、「秋が来たとは目にははっきり見えないけれど、耳に聞く風の音には、さわやかに、それと感ぜられる」と言うことでしょう。

秋はつるべ落としといわれます。7時過ぎまで明るかったお日様も、あっという間に落ちてしまいます。気が付けば秋の夕暮れです。お盆でなくなられた方を偲ばれて、また新たに寂しい思いをされている方も多いと思います。

秋の夕暮れ 少しゆっくりと、ともし火でもながめて、人生を振り返る時間をもってみませんか?今年も、ともし火とお茶の会をいたします。今年は門信徒会主催で皆で用意をしてもらいます。誘い合わせてご参加下さい。

☆研修旅行

9月4日に備後山南地方へ研修旅行に行きます。西明寺・光照寺・南泉坊の3ヶ寺を訪ねます。特に光照寺はこの中国地方に浄土真宗の教えが広まるきっかけとなったお寺です。楽しみにお参りしたいと思います。

九月カレンダー

大いなる み親の救いの 目あては この私であったのだ 東井 義雄

しかし、努めても、努めても、「死にともない心」を、どうしても超えることができないのです。浄土真宗のものだけでなく、他宗のものも、キリスト教のものも、「死」



の問題にかかわりのありそうな書物を見つけては、読みあさりました。「死」の問題にかかわりのありそうな文学作品も、ずいぶん読みあさりました。でも、どんなにしてみても「死にともない心」を超えることができないのです。

これは、私の真剣さが足りないからだと考えました。朝は、四時起床ということにしました。そして、起きると、冷たい水で、体中を摩擦して、体中

に目を覚まさせ、それから朝の勤行、勉強…というようにして、毎日をスタートしました。そのことを、別に人に話した覚えもないのに、同僚の一人が「近頃のアなたには、何か、鬼気のようなものを感じる」といつてくれたこともあります。でも、やっぱり、「死にともない」のです。何年たっても、何年たってもダメでした。

これは、「死」を、まだまだずっと先のことだと考えているためではないかと、考えました。それで、父が亡くなった年齢である、六十三歳の十一月三十日を私の最期の日と、心に決めました。

午前四時起床、全身の冷水摩擦、勤行、勉強…という毎日を、心に決めた「私の最期の日」を目指して、何年、年を重ねたことでしょ、つ。でも、どこまでいっても、やっぱり「死にともない」のです。

とうとう、六十三歳になっても、十一月になっても、あせっても、あせっても、というよりは、あせれば、あせるほど、よけい「死にともない心」が、力を増す気さえるのでした。

そして、どうにもならないまま、十一月三十日を迎えてしまいました。どうにもならないまま、その日が暮れ、遂に、空しくその時刻を迎えてしまいました。精も根もつき果てて、如来さまの前に額づいたまま、頭が上がりませんでした。ずいぶん、長い間、頭の上がないまま、額づき続けていました。

その私に、声が聞こえてくださいました。はっきり、聞こえてくださいました。それは、『歎異抄』第九のおことばでした。

「念仏申し候へども、踊躍歓喜のころおろそかに候ふこと、またいそぎ浄土へまゐり たきころの候はぬは、いかにと候ふべきことにて候ふやらん」と、親鸞聖人にお尋ねした唯円房さまのお声でした。ハッとしました。唯円房さまは、後の世に生まれてくる「死にともない私」に代って、「私」のために、この質問をしてくださったのだと思いました。

その質問に対して、親鸞聖人が、「死にともない私」をお叱りになるのではなく、「親鸞もこの不審ありつるに、唯円房おなじころにてありけり」と、「死にともない私」のためにお答えくださっているのを感じました。親鸞聖人が、高いところからではなく、「私」と同じ座までおりて、大きくうなずきながらお答えくださるのが何ともいえず、ありがたく思われました。そして、「よくよく案じみれば、天にをどり地にをどるほどによろこぶべきことを、よろこばぬ」「にて」「いよいよ往生は一定とおもひたまふなり」「よろこぶべきころをおさへて、よろこばざるは煩惱の所為なり」「しかるに仏かねてしろしめして、煩惱具足の凡夫と仰せられたることなれば、他力の悲願はかくのごとし、われらがためなりけりとしられて、いよいよたのもしくおぼゆるなり」と、答えてくださっているのです。

「われら」の中に、親鸞聖人も、唯円房さまも、「死にともない私」も、含めてくださっているのが、何ともありがたく思われました。三人で、ご一緒に、「煩惱具足の凡夫」をお目あてに現われてくださった、真如の月を仰がせていただいているような感動がこみあげてきました。

「死にともない私」のままでよかったです。「死にともない私」を「殊勝な私」にする必要はなかったのです。「死にともない私」を「殊勝な私」にする力など、「私」にはなかったのです。そんな力が「私」にあるのだったら、「他力の悲願」などなかったのです。

「なごりおしくおもへども、婆婆の緑冬きて」「ちからなくしてをはるときに」「かの土」へまいらせてもらうのです。よろこび勇んでではなく、しよ、つことなしに、「いそぎまいりたきころなきものを」「ことに」「あはれみたまふ」

み仏のところに帰らせていただくのです。「死にさま」をとり繕う必要なんか、微塵もなかったのです。七転八倒「死にともない」と、わめきながら終わってもまちがいなく、拝め取っていただける世界が、既に成就されていたのです。

